

戦後の日米間の文化摩擦について

イヴォナ・メルクレイン

日本に来た西洋人は、早速「出身地はアメリカのどこですか」、と質問されることがよくある。こう言われたら、腹の立つヨーロッパの人もあるが、幸か不幸か、日本における西洋人のイメージが、アメリカ人としてのイメージとだ、というのは事実である。日本の歴史の中には、西洋との接触の大きな時代が三つあったと言えよう。第一は、(1543-1638)スペインとポルトガルとオランダの宣教師、商売人、船乗りの時代だった。第二次は、1853年にアメリカの黒船が来たことで始まったが、アメリカに次いで、ヨーロッパの列強も日本へ外交を求めて来た。従って、1868年に明治時代に入ると、ヨーロッパの文化が日本に浸透し始めて、大きな影響を与える。ところが、第三の西洋との出会いは、第二次世界大戦が終わったあと、勝者のアメリカとの出会いであった。もちろん戦後の日本はヨーロッパの文化と関係ないわけではないが、現代(戦後の)日本は政治、経済、そして文化的にもアメリカと一番密接に結び付いている、ということは否定できない。

この複雑な関係の根拠を探っていくと、戦争が終わったあと、米軍の占領の時代までさかのぼらなければならない。当時の日本人は、初めての外国の占領によって、相当なショックを受けたようだ。ここで、「昭和一ケタの闇市焼け跡派」という世代の経験を取りあげたいと思う。

「焼け跡闇市派」と自称したのは、野坂昭如という作家だ。1930年生まれ、戦争が終わった1945年8月15日にはようやく14歳だったが、当時の記憶を描いた「火垂るの墓」と「アメリカひじき」で1967年第五回直木賞を受けた。

「アメリカひじき」のロケは60年代の東京だが、占領時代の思い出が主人公の俊夫にどんどんよみがえってくる。俊夫の妻がハワイで知り合ったアメリカ人老夫婦を家に誘ってあげたきっかけで、俊夫は青春の複雑な経験について考えるようになる。若い俊夫の場合は、「見て、聞いて、触って」といえるほど、米軍の兵士との直接的な出会いがあった。まず、見たのは、日本人とアメリカ人の身長差のことである。この肉体の違いは、まるで付きまとって離れないように、この短編小説の中で何度も述べられている。戦争の時は、

「『毛唐は、背はでかいが腰が弱い、これはつまり椅子にすわっとるからや、われわれ日本人は、畳で生活しておる、正座というのは、腰を強くするんだなあ』¹柔道教師がこう教えていた。

しかし、戦争が終わったあと、

「『アメリカ人の平均身長は一米（メートル）八十、日本人は一米六十、二十糎（センチ）もちがう、万事の差やな、これが敗因やとわしゃ考える、根本的な体力の差というのは、必ず国力にあらわれるもんなんや』歴史変じて社会の教師がいった、この教師、放言というかホラというか、どこまで本当かわからぬ話が得意で、それはいたるところ黒く塗りつぶした教科書で、神国日本たちまち民主日本を説くばつのわるさかくすためかもしれぬ……」²

身長差が敗戦の原因だという説は、少なくとも、疑わしいものだが、当時の日本人とアメリカ人の身長差がとても目立っていたに違いない。おまけに、日本に派遣された兵士は、平均的な人ではなく、米軍のエリートだったそうだ。彼らはまた平均より背の高い男子だったことを考えると、日本の14歳の子供が受けたショックが容易に分かる。そして、歴史的な敗戦の時の「肩までしかない天皇とならんだマッカーサー」³の映像が皆に強い印象を残したに違いない。とにかく、野坂昭如の文章を読んでいくと、この戦争は人種の敗戦だったような感じがする。また、このずっと大げさするほど強調されている肉体の違いは、実際に心理的な恐怖と屈辱感の象徴になっているのではないか、と思われる。

見ることも、アメリカ人が話していた言葉を聞いた印象が強かったかも知れない。俊夫の受けた英語教育はかなりおかしいものだった。戦争中教えてもらったのは、

「『お前ら、イエスカノウだけ知っとったらええねん、シンガポール政略に際し、山下将軍は、敵将パーシバルに』」⁴

つまり、こういう風に山下将軍はパーシバルが降伏するかどうか、聞いたのだ。しかし、

「敗戦後はじめの授業でこういい、黒板に『THANK YOU』『EXCUSE ME』大書し、ついで軽べつした顔で『と書いてもよう発音でけんやろ』教室見まわし、ふり仮名をつけると、サンキュー、エクスキューズミイ、ええな、このキューにアクセントつける、キュー』」⁵

そして、日本が降伏してから Thank you と Excuse me などを習う時代がきた。こういう風に、歴史が英語教育にも入ってしまった。こんな教育によって身につけた英語に自信がないことは、驚くようなことではない。

「ギブミーシガレット、チョコレートサンキュー、兵士にたとえ一度でもねだった経験あれば、とてもアメリカ人と、ああ気軽に話はできんのとちゃうか……」⁶

俊夫は、自分の世代を代表して、こういう暗い気持ちをあらわしている。

ところで、俊夫とその妻の態度の違いが面白い。同じ世代に属している妻の京子は、記憶のことを余り気にしていないようだ。自分で一生懸命に英語の勉強をしながら、アメリカ人の客が来る前に、息子に英語の挨拶を教え込むほど頑張っている。戦争のことについて、京子がこう言っている。

「『そりゃ私だって母におぶわれて防空壕へ入ったこと覚えているし、スイトン食べた経験もあるわよ、だけどいつまでたっても、昔の戦争ほじくり出して、八月十五日の記憶をあらたになんて、いやね。苦しかったことを自慢しているみたいで』、京子はむきにな

っていつのり……」⁷

女の人が男の人より柔軟で、変化によく適応するといわれている。また、今でも、日本の女性の方が男性より外国のものを快く受け入れる現象がみられる。でも、今自信たっぷり海外へ買い物に行く娘達は、京子の世代と大分違っている。京子は、主人の会社同僚と同じように、

「アメリカは一度訪れるべき、いわば、善光寺、御利益たまわり箔（はく）つけるところ、コネをたよりにちゃっかり無銭旅行する天国。」⁸

と考えているようである。また、アメリカのヒギンズ夫婦との出会いのきっかけで、息子をアメリカの大学に入らせたらどうかな、という夢が浮かび上がってくる。京子の考え方にも、当時日本の生活のあらゆる分野で機能していたアメリカの覇権がはっきりみられる。当時の日本は、アメリカの経済的なパートナー、また、ライバルになるには、まだまだだった。力強くて豊かなアメリカとの接触から生まれたアメリカに対する羨望が、日本の経済的な発展の刺激の一つになったかも知れない。

若い俊夫が触れたアメリカは、米軍の兵士のスクイーズ、つまり、握手のことだった。握手の意味がよく分からない少年がビックリして、そしてその強い握手が痛かった、という気持ちを覚えた。本当に痛かったのか、私は考えている。西洋では、どちらかという、弱い握手が気持ち悪い感じが一般だろう、という気がする。はっきり握手してくれない人は頼らない印象を残してしまう。私には強すぎる握手の思い出はない。俊夫の場合は、本当の痛みより、異質のゼスチュアに直面させられて、強い不安に感じたのかも知れない。

握手というのは、日本人にとって本当に異質なものであると思っている。私は日本人と握手したことがあるが、いつもかなり不自然、あるいは、無理しているような感じがする。更に、日本に輸入されたアメリカ風の握手は、私にとってちょっと変なものだ。なぜかという、平等を大切にしているアメリカ人の間では、誰が最初に手を出すか、という順番がはっきり決まっていないうだ。ところが、ポーランドの礼儀によると、より偉い人が最初に手を出さなければならない。いわゆる、上の人が手を出さないうちに、下の者も手を出してはいけない、というわけだ。従って、上役が部下に、年上の方が年下の人に、女の人が男の人に最初手を出すことになる。だから、私は日本で男の人に手を出されて、ビックリしたことがある。

習俗の違いについて考えると、「アメリカひじき」の文章をもう一度引用したい。

「『アメリカは紳士の国や、レディファーストいうて淑女をうやまい、礼儀を重んじよる、レディファーストの方はさしあたって関係ないが、この礼儀な、ぼくは君らが無礼なことをして、それで日本は野蛮国だと、アメリカ人に思われへんかと心配しとるんや』それまでは心ならずも敵性語を教える、そのひけめおぎなわんためか、ねずみのようにこまめに生徒どやしつけた英語教師……」⁹

1945年にアメリカが紳士の国で、レディファーストなどのような習慣を守っていたかも

知れない。今たしかにそうではない。「レディファースト」はハリウッド映画の中にしか残っていない。男女平等の時代に堂々と入ったアメリカ女性の中に、「レディファースト」と言われたら、怒る人もいるらしい。

この英語教師はなぜそんなにレディファーストにこだわるのか、と聞きたくなかった。これは日本における外国理解の浅薄さの一例になっていると思う。日本が外国人に「野蛮国」と思われる理由は、レディファーストとは関係がない。礼儀にこだわるより、道德について考えたらどうか、という質問がやむを得ず浮かび上がってくる。礼儀は形だけで、道德は人間関係の大切な内容だ、という考え方が普遍的だと思っている。この戦争で生き残った教師が、先ず「女も人間である。毛唐も人間である。人間を殺してはいけない。今まで教えていたことは間違えていた。」という簡単なことを教えた方がよかっただろう。「毛唐」などのような言葉使いから急に「レディファースト」にとんだことは、おかしいではないか、と私は感じていた。

一方、戦後の日本は本当に急に変わってきて、大分混乱して、おかしいところが一杯あった。これを分かろうとしている「アメリカひじき」の主人公はかなり、迷っている。彼のアメリカ人に対する気持ちは、子供のころから混乱したまま、大人になっても、恐怖、屈辱、感謝の変なミックスになっている。俊夫にとっては、米軍の兵士が父親を殺した人であり、一方、飢えで死にそうな時食べさせてくれた人であった。いずれにせよ、俊夫に対して、アメリカ人は力を持っている方になっている。だから、俊夫が

「ヒギンズをなにかの方法でまいらせたい、酔いつぶすでもええ、女に惚れさせるでもええ、日本のなにかに、あのにたにた笑ってくそ落着きにおちついとるヒギンズを熱中させ、屈服させたい……」¹⁰

ふと気がついた。俊夫の気持ちが、

「いやな男に犯された処女が、その男ついに忘れられんようなものか。」と述べられている。面白いことに、敗戦と占領のことを語る文学にも映画にも、セックスと関係のある隠喩が非常によく使われている。イアン・ブルマが指摘したように、

If the mushroom cloud and the imperial radio speech are the cliches of defeat, the scene of an American soldier (usually black) raping a Japanese girl (always young, always innocent) usually in a pristine rice field (innocent, pastoral Japan), is a stock image in postwar movies about the occupation.¹²

この隠喩によってみられる「無垢な」日本のイメージはかなり疑わしいものではないか、と私は感じていた。それにもかかわらず、Norma Fieldが書いた *In The Realm of a Dying Emperor* (天皇の逝く国で) という本を読んでいくと、このような隠喩の意味が分かるようになった気がする。Norma Field が、アメリカ人の父と、日本人の母の間に米軍占領下の東京で生まれた。彼女によると、セックスは覇権の象徴になっているようだ。従って、彼女自身存在が米国の覇権の結果である、と Norma Field が率直にいつている。

Many years into my growing up, I thought I had understood the awkward piquancy of biracial children with the formulation, they are nothing if not the embodiment of sex itself; now, I modify it to, the biracial offspring of war are at once more offensive and intriguing because they bear the imprint of sex as domination.¹³

いずれにせよ、「アメリカひじき」の主人公のアメリカとの出会いは、結局失敗になってしまう。これはヒギンズに見せてあげたオブシーンショウが失敗したことだけではなく、全体的にも敗者フラストレーションから逃げられないことである。

ここで、野坂昭如同じ世代を代表している、もう一人の作家と比較してみたい。江藤淳という評論家は、1932年東京生まれ、野坂昭如より二つ年上だ。彼は1963年「小林秀雄」(1962)により新潮社文学賞受賞、米国プリンストン大学に留学、翌年同大教官となり、日本文学を講じた。帰国後米国体験をもとに「アメリカと私」(1964)という本を書いた。私はこの本を読むことで、作家のアメリカ文化との出会いについて考えてみたい。

まず、江藤淳がアメリカに何をしに行ったのかということ、かつて同じプリンストン大学で学んでいた Francis Scott Fitzgerald の文学研究をするためであった。Fitzgerald を選んだ動機について、こう書いている。

「……この作家を生んだ一九二〇年代の米国は、ある意味で戦後の日本に似ている。それは、第一次大戦という深刻な体験の結果、米国がそれまでの閉ざされていた自己を、はじめて外に一欧州似に向かって開いた時代ある。それはまた、物質的繁栄が精神の荒廃の象徴をなしていたような激しい変化の時代……」¹⁴

この「物質的繁栄」と「精神の荒廃」の組み合わせが特に面白い。例えば、三島由紀夫の場合は、「精神の荒廃」とのたたかいが、結局日本主義の「精神」に生きがいを探ることになる。マサオミヨシが指摘したように、

Mishima was right in detecting the dismal futility of culture in the 1960s, which has continued to hover over Japan through the 1980s and into the 1990s…… Unlike ultra-nationalists—who range from Kita Ikki, the militarist revolutionary of the thirties, to Eto Jun, a current leading revivalist, and who advocate the emperor's metaconstitutional political position—Mishima defines the emperor as the spiritual and cultural center that would sustain the essence and purity of the Japanese.¹⁵

futility of culture というのは、「文化の荒廃」と同じような意味になっているが、つまり、戦後の日本が、経済的な発展とともに、自分の文化をどんどん失っていく、という悩みは、三島由紀夫、マサオミヨシ、江藤淳の共通点だといってもよい。三島は現実から逃げようとして、伝統的な日本文化の中に「避難」を求めていた。それで、「天皇」と武士道を信仰して、どんどん理想主義者になってしまう。

ところが、江藤淳は、三島と野坂と違って、異質の文化に直面しながら、自分のアイデ

ンティティを失わず、その異なった文化を本当に理解しようとした。彼は、自分の気持ちを冷静に分析して、自己批判を避けようとしていない。次のような発言が、江藤の考え方の典型であると考えられる。

「われわれが、外国人の日本理解の浅薄さを嘆じながら、自分たちの外国理解の浅薄さに気づいていないの不思議なことである。早い話が、私は合衆国の歴史をきわめてばくぜんとしか知らなかったし、知る機会もなかった。占領時代から今日まで、おびただしい数の米国人が日本の土を踏み、圧倒的な米国文明の影響が浸透しつつあるにもかかわらず、われわれは、この米国というかつての敵であり、今日の同盟国、あるいは経済的な競争相手を、決してひとりの他人として冷静に理解しようとしていない。それが、もちろん負けた日本人にとって容易なことではなかったとしても。」¹⁶

江藤淳にとっても、野坂のように、占領時代の複雑な記憶を克服することは難しい。アメリカに来てから、自分も無意識のうちにアメリカを避けていた、ということに気づく。留学の前に、機会があっても、米国人との交流を求めていなかった。彼は余りアメリカ映画を見ていなかったし、アメリカ音楽や英語放送などを聞かなかったようだ。

「それは、多分、占領時代に決定された勝者と敗者の関係、あるいは楽天的な教師と懐疑的な生徒との関係が、個人のつきあいのなかにまぎれこむのがいやだったからである。…しかし、これらは要するに私の心理的自己防衛にすぎなかった。私は、自分のどこかしらによどんでいる米国に対する恐怖、あるいは屈辱感で、米国人や米国文化の所産をいろいろ、それに自分で勝手に反発していただけであった。」¹⁷

このように、「恐怖」と「屈辱感」が、野坂昭如同じ、世代の経験になっていた。だが、江藤淳は、自分について反省し、それを事実として受け入れることが出発点にほかならない、と考えているようだ。異質の文化のことをアメリカに在るうちにできるだけ熱心に勉強している。勉強の結果として発見したものが、必ずしも好ましいものばかりではなくても。

例えば、妻の病気のきっかけで、「適者生存」という米国社会のルールを発見するようになる。すなわち、福祉制度が余り発展していなかった当時のアメリカが、来たばかり外国人に social darwinism の酷薄さを見せた。アメリカ社会が弱いものにきびしい、というわけだ。必ずしも福祉国家が望ましいものだと思わないが、米国における「生存競争」がある意味で残酷である、と言うことも否定できない。ただし、戦後の日本も米国を真似して、生存競争に挑戦しているのではないだろうか、と考えている。例えば、日本の「受験地獄」は「生存競争」の一種としか考えられない。いずれにせよ、江藤自身がアメリカ人に負けないように「適者生存」というルールを認めて、その競争に参加することになる。プリンストン大学に来てからお世話になったジャンセン教授との出会いについて、こう書いていた。

「今、しかし私たちは英語で話している。教授の日本語が私の英語より数等立派なものであることはわかり切っている。ここは米国であり、そうである以上は英語をつかわなけ

ればならない、と私は感じていた。……それは私が何かを主張するのための第一歩であり、だれかの意志に支配されぬための第一歩である。要するに、それは私が「適者」であることを証明するための第一歩である。」¹⁸

ここで、「言語障害」という、異質の文化との出会いに基本的な問題がでてくる。野坂昭如は、「ギブミーチェーンガム」問い得思い出のせいで、もう気楽にアメリカ人と会話できないと悩んでいた。江藤淳は、アメリカに来る前に、native speaker とのつきあいは余りなくて、彼の言語知識は、全て日本人の教師から得たものである、と認めていた。「アメリカひじき」に述べられたような英語教師であったなら、江藤は海外へ行ってからショックを受けたに違いない。しかし、「アメリカと私」によると、「適者」になるように努力して、言語障害を乗り越えるようになる。

日本人の場合、言語障害の問題が特に難しいとよく言われている。いうまでもなく、鎖国という条件下で発展してきた日本語は、他の言語とはあまり似ていない。従って、この言語障害は両方、すなわち、外国語を習っている日本人にも、日本語を習っている外国人にも同じような問題を起こしている。多分そのせいで、今でも占領の経験のない若い日本人も、とても英語を怖がっているような感じがする。しかし、アメリカの立派な日本語教育や江藤淳のような人の例えをみると、この障害を乗り越えることが無理ではない、という結論がでるだろう。悪い英語教育が日本にどんな被害をもたらしたのか、私はここでこだわるつもりはない。ただし、英語の教え方がかわらなければ、日本はある意味で、鎖国のまま残ってしまうと思う。日本が経済大国になっても、日本語は国際語になりにくい感じがする。

江藤淳は、外国の言葉だけではなく、その歴史ももっと深く理解しようとしていた。例えば、彼の米国の南北対立の解釈が面白い。南北戦争（Civil War）の跡が百年が経っても、ある程度に残っている。江藤によると、南の方はワシントンの連邦政府に対して、まるで外国である、という意識があるらしい。

「したがって、南北対立の本当の根は、むしろ、ひとつのウェイ・オブ・ライフが、力によって他のウェイ・オブ・ライフを征服しようとしている、というところにあるかも知れなかった。そして、人種差別問題は、ある意味では、南北対立の原因を別の次元に置換して象徴しているにすぎないのかも知れなかった。」¹⁹

60年代のアメリカでは、人種差別問題が一番ホットトピックになっていた、といってもよい。特に黒人問題が当時複雑で、今もアメリカの内部的な悩みの一つである。江藤が相当時間を使って、この問題をいろんな角度から観察している。「白人は悪い、黒人はかわいそう」という簡単なステレオタイプを避けて、対立の本当の根を探そうとしている。この探求は、米国の歴史を勉強することを要求する。その結果として、南北対立と日米関係の不思議な比較がでてくる。

「一方、ウェイ・オブ・ライフの問題についていえば、北部からの影響にファナティッ

クに抗しつづけている南部とはちがって、提督ペリーの来船以来、日本人は、欧米列強の圧力に対して独立を保つために、自分の手で自分のウェイ・オブ・ライフ破壊しつづけて来ていた。人はそれを「めざましい近代」と呼び、ウェイ・オブ・ライフが自在に変えられるという幻想に頼って生きている。こういう悲惨さは、おそらく南部にはなかった。」²⁰

ウェイ・オブ・ライフというのは、いわゆる、文化と似たような意味がある。戦後の日本文化についての江藤淳の反省は興味深く、同時に相当苦いものである。ここでもう一度経済的な発展に伴う文化の荒廃という現象が、明らかに江藤淳の心をいためている。「アメリカと私」の作者は、異質の文化のことを一生懸命に勉強する、一方、自分のアイデンティティをととても大切にしている、といってもいい。日本文化の状況に関する不安は、これの一例といえる。

江藤淳のアメリカ体験の記憶の中で、一つの典型的な思い出が際立っている。それはすなわち、「寒い孤独の感覚」という気持ちである。最初来たばかりの時妻が病気になって、どうしたらよいか分からない感じ、それは外国へ行ったが人だれにもある経験だと思う。しかし、そのあとの章にも、このアメリカ社会における孤独問題が繰り返される。例えば、夫婦関係について、

「実際米国の生活はきびしい。それは、いわば夫ひとり、妻ひとりで耐えて行くにはきびすぎる環境である。自分のことは黙って自分で処理するのが原則のこの社会で、かりに頼りにできる人間を捜すとすれば、それは夫、あるいは妻の以外にない。」²¹

「自分のことは黙って自分で処理する」という原則はきびしいかも知れないが、一方、これこそ、アメリカが誇っている独立と個人主義の原則にもまっている。米国のフロンティア精神の中で、自分で自分の面倒をみる、とという考え方は基本だ。英語の中にMind your own business,あるいは、It's not your business,という決まった文句もある。ところが、日本語で一番よく使われる言葉は、「お世話になります」と「よろしくお願ひします」だと思う。両方は、自分で自分の面倒をみるわけではなく、むしろ、他人に何かをしてほしいという意味をあらわしている。「世話する」を英語に訳してみると、take careになるが、これが子供や病人などにつながってあるような感じがする。

さて、日本人は皆子供なのか、という変な質問がでてきた。十九世紀後半のヨーロッパに、「日本人は、自然と子どもっぽく調和して素朴に生きている古代人のようなものだ」²²、という日本人像があったそうだ。こういう風に考えれば、オリエンタリズムのわなにかかってしまう可能性が高い。日本人を a nation of twelve-year olds と述べたマッカーサーも、ある意味でオリエンタリストであった。しかし、日本の作家坂口安吾も、子供のようだといって、日本人を批判している。

この「子どもっぽさ」は一体何かと考えると、先ず「子ども」の定義から始めなければならない。百科事典には次のような説明が載っている。

「……子どもの第1の意味は人生の段階の一つということである。乳幼児、子ども、青

年、壮年、老年というように世代的に区分することは洋の東西を問わず古くから行われてきたことである。日本における〈世代としての子ども〉は、年齢的には7歳から15歳までの者をいうのが古くからの伝統であった。」²³

しかし、現在日本では20歳になるまでは未成年である、という法律が存在している。私にとって面白いことは、日本で大学生がまだ子どもだと思われることだ。大学の友達の間でも、同級生のことを「あの子」という言い方をよく耳にする。西洋の大学生は、「子」といわれたら、怒る人が多いと思う。高校をでたら、大人になるという意識がある。ポーランドで大学時代が一番いいとよくいわれる。なぜかというと、大人の権利をもって、義務をまだもっていないからである。私はこのような考え方が当然だと思っていたが、日本人の考え方と違うことは明らかである。例えば、西洋で大学生が大人と思われるので、アメリカでもポーランドでも学生結婚が一般的な現象になっている。ところが、日本では、学生結婚はわりと少ない。これについて日本人の意見を聞いてみると、大学生は経済的に独立していない、いわゆる、「社会人」になっていないので、家族を作れないと思われるようだ。経済的な責任をとれないうちに、結婚はしない、という日本人の考え方はとても保守的だ、と思う人もいる。しかし、西洋人の考え方よりずっと理性的ではないか、と私は考えている。西洋においても、「成熟」という概念は、「責任」の概念と昔からつながっていた。現在のアメリカ人もヨーロッパ人も、矛盾におちているかも知れない。一人のアメリカー日系人の経済学者が指摘したように、

Being independent does not mean that an eighteen-year-old earns his or her own way, however, so the independence a college student enjoys is not the independence in the true sense of the word. (……) American parents have the thankless role of paying huge sums of money for their children's education without being able to intervene in their daily lives. ²⁴

この点では、日本人の方が絶対子どもっぽいとはいえません。論理的で成熟していると考えられる。しかし、この「子どもっぽさ」の問題はこれだけには限らない。

「子どもという言葉と概念について考えようとする際に、まず注目されるのは、その意味の多様性であろう。……要約するなら、子どもとは一種の関係概念であって、ある構造の中心にあって力を持つものの側から見て、同種・同族でありながら、ちょうど対関係にあるもの、すなわち年齢の大きいものに対して小さいもの、成熟に対して未成熟、独立に対して依存、支配に対して従属、などの関係にあるものの総称という把握が可能であろう。」²⁵

独立に対して依存、支配に対して従属—この二つのアスペクトには、アメリカに対する戦後日本の立場があてはまるようだ。戦後50年が経ってから日本がアメリカの経済的な競争の相手になっても、政治的に本当に独立したかどうか、いまだに論じられている。

私は上にも述べたように、「成熟」の概念は「責任」と関係ががら思っている。従って、日本人が戦争に関して全体的な責任をとらないうちは、ある意味で「未成熟」のまま

である。日本の国会で論じられている「植民地支配」の問題について、日本の政治家が「西洋の列強も同じことをやっていたので、一方的なお詫びに反対」、という議論を出している。でも、これは弁解だけにすぎない、と私は考える。イアン・ブルマがいつているように、

In these Japanese evasions there was something of the petulant child, stamping its foot, shouting it had done nothing wrong, because everybody did it. This claim to be like everybody else was particularly odd, since one is so used to Japanese describing themselves as unique, culturally, ethnically, politically, historically.²⁶

ブルマの日本人批判は本当にきびしい。彼によると、日本人は政治的な意味だけではなく、文化的にも「未成熟」であるそうだ。ここでもう一度彼の文章を引用しよう。

There is something intensely irritating about the infantilism of postwar Japanese culture: the ubiquitous chirping voices of women pretending to be girls……; the screeching “television talents” rolling about and carrying on like kindergarten clowns; the armies of blue-suited salaried men straphanging on the subway trains, reading boys’ comics, the maudlin love for old school songs and cuddly mama-sans.²⁷

私もブルマと同じように、子どものふりをしている日本の女性を見て、「おかしいなあ」と思ったことがある。しかし、これは日本と西洋における女らしさの理想が違うからだろう。日本的な女らしさは、「かわいい」というキーワードで表現されている。そして、「かわいい」というと、必ず「若い」の意味も含めている。西洋人より日本人の方がこの若さを大切にしているような気がする。テレビのタレントなどを見ると、女の人は、若くなくても、一生懸命「かわいい子」のポーズを気取っている。子どものポーズはいろんな意味で、たしかに便利な立場である。きびしい男尊女卑で育てている日本女性の生活の知恵かしら、と考えるようになった。

ブルマが指摘したように、日本のテレビタレントが「子どもっぽい文化」の代表的なものである。この場合、「子どもっぽい」の意味は、「レベルの低い」と同じ意味で使われている。大衆文化の時代に大きな影響を与えているテレビは、文化全体のレベルをダウンしてしまう、という現象が世界中どこでもおこっている。つまり、これは日本だけの問題だけではない。ただし、日本ではくだらない番組の氾濫が特に目立っている、という印象はなんとなく私にもある。最初このような番組を見て、言葉が分からないから、面白くないと思っていたが、言葉が分かるようになって、全然面白くない。これは私の経験だけではなく、日本に来るほとんどの外国人の感想である。昔から深い文化を持っている日本は、なぜこんなくだらない大衆文化を作ってしまったのか、という矛盾は、私にとってどうしても分からない謎になっている。誰がこのようなものを見ているのか、という質問に、「大変疲れている人」、と日本人の友達が答えた。きびしい「生存競争」にかかわって

る現代の日本人は、果たしてこんなものによってしかリラックスができないのだろうか、と私は考えていた。江藤淳が述べた経済的な発展と文化の破壊とは本当に因果関係があるのだろうか。この現象はどうしても避けられないのだろうか。という質問に、私はまだ明快に答えることはできない。

註

- 1) 野坂昭如「アメリカひじき」筑摩現代文学大系(92)、筑摩書房、東京、1976;110ページ。
- 2) 同書、117ページ。
- 3) 同書、125ページ。
- 4) 同書、110ページ。
- 5) 同書、109ページ。
- 6) 同書、116ページ。
- 7) 同書、120ページ。
- 8) 同書、132ページ。
- 9) 同書、109ページ。
- 10) 同書、133ページ。
- 11) 同書、132ページ。
- 12) Ian Buruma, "The Wages of Guilt. Memories of War in Germany and Japan"; Farrar Straus Giroux, New York, 1994; p. 52.
- 13) Norma Field, "In the Realm of a Dying Emperor"; Pantheon Books, New York, 1991; p. 39.
- 14) 江藤淳、「アメリカと私」; 講談社、東京、1965; 46ページ。
- 15) Masao Miyoshi, "Off Center. Power and Culture Relations Between Japan and the United States"; Harvard University Press, 1994; p. 163.
- 16) 江藤淳、前掲書、49ページ。
- 17) 江藤淳、前掲書、49-50ページ。
- 18) 江藤淳、前掲書、32ページ。
- 19) 江藤淳、前掲書、82-83ページ。
- 20) 江藤淳、前掲書、85ページ。
- 21) 江藤淳、前掲書、75ページ。
- 22) ブライアン・モーラン、「日本文化の記号学」、東信堂、東京、1993、221ページ。
- 23) 世界大百科事典、平凡社、東京、1994;(10)421ページ。
- 24) Ryuzo Sato, "The Chrysanthemum and the Eagle. The Future of U. S. -Japan Rela-

(12)

tions"; New York University Press, New York and London, 1994; p. 82.

25) 世界大百科事典…420ページ。

26) Ian Buruma, *op. cit.*, p. 294.

27) Ian Buruma, *op. cit.*, p. 295.

参考文献

- ・野坂昭如「アメリカひじき」、筑摩現代文学大系(92)、筑摩書房、東京、1976。
- ・江藤淳「アメリカと私」、講談社、東京、1965。
- ・世界大百科事典(10)、平凡社、東京、1994。
- ・日本現代文学大辞典、明治書院、東京、1994。
- ・ブライアン・モーラン「日本文化の記号学」、東信堂、東京、1993。
- ・Ian Buruma, "The Wages of Guilt. Memories of War in Germany and Japan." Farrar Straus Giroux, New York, 1994.
- ・Norma Field, "In the Realm of the Dying Emperor." Pantheon Books, New York, 1991.
- ・Masao Miyoshi, "Off Center. Power and Culture Relations Between Japan and the United States." Harvard University Press, 1994.
- ・Ryuzo Sato, "The Chrysanthemum and the Eagle. The Future of U.S. - Japan Relations." New York University Press, 1994.
- ・Edward Said, "Orientalism". Pantheon Books, New York, 1976.